

[足音]

タイトル：北アイルランド、ベルファスト

バックパックを背負った学生が、大学の建物に入っていく。

Rory [ナレーション]：人は困難に直面する時、その心の強さを試されるものだと思います。

[物思いにふけるようなインストルメンタル音楽が流れる]

大学の講堂に座っている学生たち。バックパックを背負っていた学生は、クォータージップの服を着て、長机に座っている。彼の目の前には、MacBookが開かれている。プレゼンターを着た講師が、講堂の前方で講義をしている。

講師：では、今週もビジネスの理解と分析について学んでいきます。今日の内容は...

クォータージップの服を着た学生が、MacBookのトラックパッドを操作している。

Rory [ナレーション]：大学に進学できたのは大きな成果でした。それはある意味でずっと...不可能への挑戦でした。

画面が暗転し、黒い背景に白い文字が大きく表示される。

タイトル：RORY

[音楽が止まる]

窓に雨が打ちつけ、外では木が揺れている。

Rory [ナレーション]：大学進学に向けて勉強を始め、少し経った頃、

クォータージップの服を着た学生、Roryがベッドに座り、AirPodsとiPadを使っている。

Rory [ナレーション]：建築学の授業の最中に、ホワイトボードに何が書いてあるのか見えなくなっていることに気づきました。

iPadの光がRoryの顔を照らし、彼の視線が画面の動きを追う。Roryの両親がキッチンのテーブルに並んで座り、インタビューに答えている。

Roryの父親：あの時がすべての始まりでした。救急で診察を受けて、たくさんの検査をしました。

Roryの母親：何が起きているのかよくわかりませんでした。

Roryの母親がキッチンカウンターに立ち、お茶を淹れている。

[カタッという音]

Roryはテーブルから、iPadで母親の写真を撮る。画面上に拡大表示されているアプリのアイコンをスワイプし、Procreateを開く。

[再び音楽が流れる]

Rory [ナレーション]: それから2、3か月の間に、5～6メートル先の距離でもホワイトボードの文字が読めなくなり、やがて、目の前の画面の文字すら読めなくなっていました。

RoryはApple Pencilを使って、キッチンにいる母親の写真の上に何かを描いている。

Rory [ナレーション]: 17歳の誕生日の頃、遺伝子検査の結果が出ました。レーベル遺伝性視神経症という病気であることがわかりました。わかりやすく言えば、視力が3～5%しかありません。

Roryは、写真に白い陰影を描き加えていく。

インタビュアー: 今、何をしているのですか?

Roryがインタビュアーの方を向く。

Rory: 私に何が見えているのかを正確に描こうとしているんです。うまく説明できないのですが、何が見えて何が見えないのかをわかりやすく絵に描いて表現しようとしています。

白い陰影にかき消されて、画像が見えにくくなっている。

Rory [ナレーション]: 人生でこのようなことが起こると、人は、自分を哀れむか、それとも、解決策を見出そうと心に決めるか、どちらかです。

RoryがApple PencilをiPadに取りつける。

[カチッという音]

学校の教室で、教師がインタビューを受けている。

教師: 学校での成績はずっとオールAでしたし、本人もそれを自負していました。とても大学に行きたがっていました。困難な道のりになることは、みんなわかっていました。

再びキッチンテーブルの場面。RoryはMacBookを操作している。

Rory [ナレーション]: 入院中はiPhoneでアクセシビリティ機能を試していました。

RoryはApple Watchをつけた手首を持ち上げ、文字盤をタップする。

[チリンチリンという音]

Roryが立ち上がる。

Rory [ナレーション]: iPhoneを使いこなせれば、なんとかなると思いました。

RoryはiPhoneを手に、笑いながらキッチンから出ていく。

Rory: 誰かが動かしたね。[笑い声]

Roryは外へ出て、裏庭を横切る。

Rory [ナレーション]: 家に帰るたびに言っていました。「勉強を再開しなきゃ」と。「病気のせいで自分の成績を下げるわけにはいかない」と。

Roryは机の前に座り、バッグからMacBookを取り出して、スタンドの上に置く。さらにキーボードも取り出す。キッチンのテーブルでは、Roryの両親へのインタビューが続く。

Roryの母親: 勉強に全力を注いでいました。まったく新しい学習方法に順応したのです。

RoryのMacは外部ディスプレイに接続されている。ディスプレイは、Roryの目の前に来るよう、机の中央手前に置かれている。

Rory [ナレーション]: Macの「システム設定」を開き、アクセシビリティの画面で、まず「テキストの拡大」と「ズーム機能」を有効にしました。

RoryはMacのアクセシビリティ機能を使用している。

Rory: これは、本当に画期的でした。こういう画面では

Roryはディスプレイ上の小さなFinderウィンドウを指差す。

Rory: 私には何も見えません。これなら、ない方がましです。

Roryは画面を拡大して、Finderウィンドウを閉じる。さらにWord文書のテキストを拡大して、文章を入力する。

Rory [ナレーション]: でも、文字を拡大したら、自分なりの方法で画面を操作できたのです。多くの人にとっては些細なことでも、私には大きなことでした。退院した日の夜、Macの前に6時間座り続け、山のような課題をこなしてみ、思いました。これならできる、これでやってみよう。

[キーを打つ音]

Rory [ナレーション]: 視力がさらに悪化したので、文字サイズを大きくして、ほかの機能も有効にしました。授業にも出られたし、課題も自分でこなせました。

RoryはiPhoneを使って、机の上に置かれた書類を写真に撮る。

[カメラのシャッター音]

Roryは撮った写真をMacに取り込み、試験の説明が書かれたその書類を拡大表示する。再び教室の場面に戻り、教師が話し始める。

教師：彼は再び、主体的に学べるようになったのです。Apple製デバイスがなければ、彼は大学進学資格を得られなかったと思います。

Roryはベッドの上でMacBookを開いている。

Rory [ナレーション]：3科目で最優秀の成績を収めました。これは学校でもトップクラスです。

教師：彼は満点を取りました。完璧な答案用紙なんて、めったにお目にかかれません。

Roryの父親：Appleにメールを送ると言うので、何を書くのだろうと思いました。[笑い声]

Rory [ナレーション]：書いた内容は二つあって、一つは感謝の気持ちです。もう一つは、私と同じような病気で苦しんでいる人たちを助けたいと書きました。

RoryはMacBookでメールを作成している。件名には「Appleのアクセシビリティ機能のおかげで私の人生は変わりました—ありがとう！」と書かれている。彼がメールを読み上げる。

Rory：2024年1月、私の人生は一変しました。そしてそれから数週間後に...

Roryはテキストを拡大する。

Roryの母親：他人に理解してもらうのは本当に難しいことです。彼は同情ではなく、ありのままの自分を受け入れてほしいと思っています。

ジムで、Roryとコーチがハグをする。

Rory：ひさしぶりだね。

コーチ：ああ、そうだね。

Rory [ナレーション]：見た目ではわからない障がいもあります。私も障がいがあるように見えません。

コーチがRoryの手と手首にバンテージを巻く。彼らはボクシングのリングに入り、スパarringをする。

[パンチを打つ気合いの声]

Rory [ナレーション]：他人のことはわからないものです。

[激しい息遣い]

[パンチを打つ気合いの声]

車に乗ったRoryが、手にiPhoneを持っている。

Rory : リンジーにメッセージ。課題の準備は進んでる？

iPhoneの画面の縁に、Apple Intelligenceが動作していることを示すカラフルな光が表示されている。

Siri : 送信しますか？

Rory : はい。

メッセージが送信される。

[メッセージの送信音]

Roryはバックパックを背負い、ほかの学生と一緒に歩いている。彼らは街の通りを渡る。

Rory [ナレーション] : 画面はずっと拡大して使っていました。

授業中、Roryはまた別の学生と一緒に座っている。

Rory [ナレーション] : 今はMacBookで文字を入力したあと、画面を元に戻すことで、周りの人たちにも普通に読んでもらえます。

先ほどの学生がApple Pencilを手に持ち、RoryのMacBookの画面を指差す。

Apple Pencilを持った学生 : つまり... ちょっと待って、ズームアウトして。1、2、3、4、5章あるね。序章と提言をお願い。

Rory : いいよ、君は？

Apple Pencilを持った学生 : 技術面がいいかな。

Roryは椅子に深く腰掛け、その学生の方を見て微笑む。

Rory [ナレーション] : インクルーシブな観点に立ち返れば、同じ機能があって、使わない人もいます。

教師 : どの教師にとっても、彼は深く印象に残る存在です。彼は私に、指導に対する別の視点を教えてくれました。「このやり方を教えて」と生徒に聞くようになりました。

教師が教室の前方に立ち、授業をしている。場面は再びRoryのいる講堂に戻り、彼はMacを操作している。

講師 : 成功すれば、必ず周りへと広がっていき、自分に返ってきます。

Rory [ナレーション] : 障がいは、私という人間のすべてではなく、あくまで一部分です。

夜、Roryがスタジオに入る。撮影スタッフがRoryを録音ブースへ案内する。

Rory [ナレーション]: 将来のことはわかりません。きっとどこかに、進むべき道があるはず。まだ気づいていないだけで。

Roryはマイクの前に座る。

Rory: 私はRory、18歳です。私は2年前から視力を失いつつあります。でも、私の物語は終わったわけじゃなく、新たな章が始まったところです。

Appleのロゴ。